

瞑想するドメニコ会士たち

ーローマ、サンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ修道院の失われた第一廻廊装飾壁画

慶應義塾大学（美術史専任講師） 荒木文果

15 世紀中葉、スペイン出身のドメニコ会士フアン・デ・トルケマダ枢機卿（1388-1468 年）は、ミネルヴァ聖堂に隣接する第一廻廊壁画装飾のために『瞑想』を構想し、本書に取り上げられた『新約聖書』の主題を中心とする 34 場面からなるフレスコ画連作がその廻廊の壁面に描かれた。本壁画は、制作から約 1 世紀後に開始された廻廊の大規模な改修工事により全て失われたが、現存する 29 冊の写本と多数の木版挿絵入り活版印刷本から、連作の各場面の主題や図像について、ある程度知ることができる。また、これらの史料によって、34 場面の一区画ごとの構造も既に明らかとなっている。すなわち、各区画は上部に『瞑想』の主題を絵画化した画面があり、その下に関連する銘文が書かれていた。そして、さらにその下方には、座って瞑想する修道士の姿が描かれていたのである。

ミネルヴァ修道院の失われた第一廻廊装飾壁画連作については、作者帰属や制作年代について関心が寄せられてきた。近年では、デ・シモーネ（2002 年）によって、ドメニコ会士フラ・アンジェリコ（1387/1400 - 1455 年）が、最後のローマ滞在時に本壁画制作へ全面的に関与したことが指摘されている。また、現存する写本と印刷本を取り上げて、ドナーティ（1939 年）やペシエル（1996 年）は、図像学・図像解釈学的観点からの考察を進めた。また、2009 年にブルジョアは、廻廊装飾の各場面の配置を復元する試みを発表している。一方で、壁画の最下層に描かれていた修道士の姿には、従来ほとんど関心が寄せられてこなかった。しかしフッド（1993 年）が指摘するように、15 世紀フィレンツェで制作された修道院の廻廊装飾が各共同体の自己喧伝・自己表象の場であったことを考えるなら、フィレンツェ美術の影響を強く受けたミネルヴァ修道院第一廻廊に登場するドメニコ会士の描写は、当時彼らに求められた役割を最も直接的に視覚化していると考えられよう。そこで本発表では、まず、本壁画装飾事業に関わった注文主、芸術家、制作年代について概観した上で、上記文献史料の読解を通じて、ミネルヴァ修道院第一廻廊で修道士たちがどのような身振りをしていたかについて確認する。さらに、修道士たちの描写とフラ・アンジェリコがフィレンツェのサン・マルコ修道院の僧房に描いたフレスコ画群に登場する聖人たちの描写とを比較し、その特異性を浮き彫りにする。続いて、主要場面の枠外に、列聖されていない修道士を描くという当時としては極めて稀な表現が、写本装飾の影響下にあった可能性を示す。そして、写本のページを繰るように、廻廊という場所で本壁画は、修道士たちが共同で行っていた祈禱に供するとともに、修道士に対してだけでなく廻廊を訪れる人々に対して、ドメニコ修道会の役割を表明する意図があったと考えられることを明らかにする。さらに、『瞑想』という主題選択自体が、その分野で圧倒的な影響力を誇っていたフランチェスコ会を意識したものであったと考えられることも併せて指摘する。